

Title	ダンテのさまよひ
Sub Title	
Author	大類, 伸(Orui, Noburu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.3 (1924. 9) ,p.1(344)- 15(358)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 史學 第三卷 第三號 大正十三年九月

## ダンテの死よひ

瞑想と活動——マルタとマリヤ——リアとマテルダ——帝政論——ダンテの現實的活動——彼の歴史觀と羅馬崇拜——

神曲への向上——中年のやまよひと最後の救濟

一

ダンテは『神曲』の淨罪界の終に近い處、即ち淨罪の山を攀ぢて「地上の天國」(Paradiso terrestre)に入らうとする處で、假睡の夢に若い美しい少女リア(Giovane e bella)に逢つた。(淨二)リアは絶えず花を摘みつゝ少しも手を休めない、而して又謠ふ『我は絶えず花環を作りつゝ働けども妹ラケレは終日鏡に己が面を映しつゝ少しも動かず』と。リア、ラケレ姉妹の物語は夙く舊約、創世紀に見えたの

ダンテの死よひ (大類)

(續)

1

で、中世では此の姉妹に現はれた生活の對照を、人間生活の二つの規範としての活動と瞑想（*Vita activa, vita contemplativa*）とに比較した。（Toynbee, Dante Dictionary）舊約に現はれた此の姉妹に比すべく對照は當然新約にも現はれて居る、路加傳第十章に記されたマルタと妹マリヤとはそれである。マルタはイエスを饗應せんとて奔走に努めて居るのに、マリヤはイエスの膝下に跪いてたゞ靜かに教を聽く、而してイエスは其の姉妹のいづれをも正しと認めた様ではあるが、マリヤの靜かに精神の糧を養ふ態度を以て最善とした。活動と瞑想とに對する基督の態度に就ては今茲に論じない。たゞダンテの如き眞に活動と瞑想との間に一生を送つた天才に、此の二つの生活が如何に考へられたかゞ私の問題なのである。

マルタとマリヤとの話に就てはダンテも無論、其の『饗宴』（Convivio）の内に述べて居る。（Conv. IV. 17）其の章でダンテは活動の生活を善なりとし、瞑想を最善とし、其の證としてマルタ及びマリヤに對する基督の語を引用して居る。但し新約に記された處に依れば、基督はマルタの煩勞に對し『マルタよ、マルタよ、爾多くのことに依り思ひ煩ひて心勞せり、されど無くて叶ふまじきものは一つなり、マリヤは既に善き方を撰びたり』と云つて居る、之に依れば基督の考は「マルタの心盡しも神の教に傾聽すると云ふ肝要の一事を缺いては完ふされない」と云ふにあると思はれる、所謂九仞の功を一簋に缺くものであらう。然るにダンテは『饗宴』に於て、基督の『無くて叶ふまじきものは一つなり』の句の次に『即ちそは汝の今爲せるもの』と云ふ一句を注として入れて居る、而して少し後の方に、基督は活

動を善と見られしも、尙瞑想を最善とせられたりと記して居る。固より新約記載の意味とダンテの解釋とは大體に於て一致しては居るが、ダンテに在ては瞑想に對して活動その者の善なる意義を明かに主張して居るのが注目される。即ち「瞑想は固より最善なれども活動も亦それ獨自にて善なり」と說いた、新約の記載にはそこまでは說いて居らない、否或は「瞑想なんくんば活動も遂に無意義なり」との意味にも解せられる。果して然らば現世的活動に對する見解に於て初期基督教時代と中世末期との間に認められる差違が、正しく此の新約とダンテとの間に認められなければなるまいと思ふ。私は少くとも古代末期（又中世初期）に對する中世末期の獨特な立場を、ダンテに於て見出したいのである。

## 二

瞑想に對して活動を重じたことは、ダンテの『饗宴』によく認められるが、それと同様考は神曲にも亦明かに示された、最初に述べたリアとラケレとの話説は即ちそれである。ダンテがリアに逢つたのは淨罪界の遍歴も終つて、これから天國に進むべき準備として「地上の天國」に入らんとした時である、地上の天國は地上の生活の極致である。其の地上の生活の最上段とも云ふべき「地上の天國」に於て、ダンテは活動の生活を表徵する少女リアに出會した、併し其の對照をなせる瞑想の代表者ラケレには終に逢ふことが出來なかつた。彼がリアのみを見たことは、地上の生活にいかに活動が肝要なるかを語つ

て居る。(神曲ケーリー注參照) 基督に在ては現世よりも彼岸に重きが置かれて居る、少々とも現世に對しては無關心の態度である、アリストートル哲學の洗禮を受けて來たダンテの時代に於ては、人々はもはや現世に對しては無關心では居られなかつた、基督教の超世的精神を棄てないながらも、能ふ限り地上のものを是認し、それを自家の藥籠中に收めやうとした。そこにゴシツクからルネサンスに亘る時代の悲壯な努力と煩悶とが認められ、そこに又我等の興味が集中されて来る。

舊約にはリアとラケレに依て、而して新約にはマルタとマリヤとに依て示された活動と瞑想とは、ダンテ當時の女性の内にも當然代表者を求めらるべきであつた、而してダンテはそれをマテルダとベアトリチエとに求めた。ベアトリチエに就ては茲に説くの要もあるまい、又マテルダは如何なる婦人か不明であるが、恐らく獨逸の尼僧であつて其の書物の感化をダンテが少からず受けたのであると云ふ。(トインビー參照) 其の素性の詮議は茲に必要がない、兎も角ダンテは神曲でリアに逢つた後、地上の天國を通過するのであるが其の際彼を導いた少女は其のマテルダであつた、而してダンテを愈天國に導くべく理想の女性ベアトリチエが出現するに及んで、此のマテルダは影を隠してしまふ。等しく活動を表徵しながらも、舊約の女リアはたゞダンテの夢の裡に現はれ、當時の人マテルダは現實の姿として神曲に描かれて居る、而して地上の生活の窮極即ち「地上の天國」の導者となつたのは其のマテルダであつた、即ちベアトリチエがラケレの姿を現實にした意味を有つと同様に、マテルダはリアの姿が現實化された

ものと見られるのである。

ダンテが地上の生活に活動を重じたこと、乃至人間の生活に現實の深い意義を認めたことは、神曲に現はれた以上の女性の上によく示されて居ると思ふ。此等の點を先づ理解して而して後に現實に於けるダンテの活動、或は彼の政治論、歴史觀等を考へると、我等の興味は一層深くなつて来る。今少しくダンテの政治的著作を見るべく『帝政論』(De Monarchia)に就て述べて見やうと思ふ、固より『帝政論』全部に亘つてではない、主として現實に對するダンテの興味を考察したいと云ふ本篇の立場からしての卑見である。

### III

帝政論は世界が一人の帝王に依て治めらるゝ必然なことを、理論的に更に歴史的に論證し、而して其の世界的帝王と精神界の世界的代表者たる法王との權力關係にまで論及したもので、ダンテが饗宴篇を書いた後神曲の大作に著手するに至るまでの中間に著はされた書である。全篇に亘つて其の理論は全くスコラ學派の論證法を以て、アリストートル哲學と基督教神學との智識を根ね上げたものに外ならぬ其の内容から考へても、ダンテの才が理論的方面に長じて居らないことが窺はれる、彼は哲學者ではなく詩人であつた、或は理論家ではなく寧ろ實際家であつた。さればこそ彼は傳説や史實を取扱ふに於て

極めて鋭敏であり深酷である、それは神曲地獄界に於て如何に彼が恐しい程の鬼才を發揮したことに依ても明かであらう。ダンテが詩人として的一面に政治家としての天分、或は現實に對する深い興味を有したことも亦そこに窺はれる。かくして我等は帝政論の内で最もスコラ學派的な第一篇を讀んで、其の巧緻を極めた拮掘な辨證法に厭倦を覺えた後、第一の篇終末第十六章に入ると彼の筆は遽かに活躍して極めて戯曲的な華麗を呈して來るのを覺える。其の一章は基督出現當時に眞の平和を享受した世界が、やがて其の平和に破綻を生じたことの不幸を說いたもので、ダンテが人事や歴史を説くに如何に熱情的となつたかを知り得る、我等は帝政論中茲に至つて始めて、ダンテの眞面目の躍如たるを見ることが出来ると思ふ。蓋しダンテは滿腔の憤慨を、基督出現當時の世界的平和が、中世羅馬教會の俗化の爲めに攬亂されたことに注いで居るらしいのである。(帝政論、ターサウターナー注、サウターナー参照)

ダンテは帝政論の始に於て帝國の定義を下して、『時の裡に現はるゝすべてのもの、又時に依て解釋せらるゝすべてのものに對する唯一人者の支配である』と述べて居る、(帝政、一ノ二)茲にもダンテが政治なるものを全然現實的方面に限定して、宗教的、超世間的な意義を認めまいとする態度が窺はれる。要するに彼の所謂帝國は全然地上のもので、そこには彼岸的意味は毫も考へられて居らない。(サウターナー注、サウターナー参照)

此の場合彼の態度は全く實際的である。固よりダンテは窮境中世の人である、彼の論證は徹頭徹尾スコラ學派的で、或は帝政論一篇要するに紙上の空論に過ぎずとも云ひ得る。之に比すれば帝政論にやい

遅れて現はれたパドヴァの學者マルシリオ (Marsiglio da Padova) の著『平和の擁護者』(Defensor Pacis) は一層實際的であらう、而して其の實際的傾向は約二百年の後マキヤヴェリに於て頂點に達したのであつた。併しダンテの帝政論の内容如何は兎も角として彼が此の一篇に筆を執つた因縁は、現實問題に對する彼の深い興味に在つたことは拒まれまい。『萬物は何事か爲さんがあらざる爲めに存在す、萬物の終極目的はそれ自身の爲めの存在にあらず、各自の性に相應して活動すべく神に依て定められたり』(帝政一ノ三) と云ひ、又『人が各自の力を働かしむることは現世の幸福に外ならず、其の模範は地上の天國に認めらるべし』(帝政三ノ十六) とある如きは、ダンテの興味が主として現實と活動とに存することを示すものであらう、殊に後者の一句は嚮に述べたレアの話の説明とも見られるのである。彼が帝政論の劈頭に『人は如何に政治問題に通曉せりとて、社會全體に對し何等かの貢獻をなさずんば、明かに人間としての義務を怠りし者なり』(帝政一ノ一) と喝破したのを見て、我等は益々ダンテの面目の躍如たるを覺える。

#### 四

上述の如き現實的活動に對するダンテの興味は何に依て起されたか、それは彼を遠る當時の伊太利特にフロレンス市の政治的環境の爲めに強い刺戟を受けた天才が、如何にかして眼前の不幸と不和とを一掃して、靜かな平和 (Tranquilitas) を世界に齎したいとの切なる願が、空想に富んだダンテをして一直

線に現實に向つて邁進せしめたことゝ思はれる。私は今茲に若いダンテが從軍してフロレンスの爲めに戦つたこと、帝政顧問の一人としてフロレンスの政治の衝に當つたこと、黨争の爲めに奔走したこと等の事情を嘗めたこと、更に獨帝ハインリヒ七世の軍を迎へて伊太利救濟の戰爭の爲めに追放流浪の艱難を述べたくない。たゞ帝政論一篇が彼の時世匡救の切なる願ひの結晶であることを認め得れば充分である。淨罪界第六歌の後半に幾多の亡靈がダンテの前に現はれて、いづれも伊太利の紛亂を歎き故都フロレンスの騒擾に憤慨して居るのを見ても、死して尙故國の事が忘れられない人々の深い執着に感服すると共に其等の亡靈が實はダンテ自身の姿であることに氣附かずには居られない。(淨、六及地、二十八)又ダンテが地獄の門に進み入らんとした時、門内に起る恐ろしい苦患の叫びを耳にした時、ヴァーグルは唯自己の爲めにのみ働いて神に對して毫も盡さざりし人々の永遠の苦しみだと説明して居るが、全般の爲めに盡力せざりしことを憎んで已まないダンテの峻烈さは能くそこに窺はれると思ふ。(地、三)

元來ダンテは中世思想の綜合者と云はれて居る、彼の語る所は要するに中世基督教思想の反映である、從て帝政論に於ても彼の主張は一人の世界的帝王の出現にある、複雜を極めた世界各國家各民族の上に一人の理想的君主の君臨せんことである。彼の主張が如何に空想的であるかの論は茲に避ける、たゞ多數の上に唯一の絶對支配を認める點に於て、彼は明かに中世の人である、『一は善の源にして、多は惡の因なり』(帝政一)『より生ずる結果は多より生ずる同一の結果より勝れり』(帝政十四)『多數は過剰を意

味す、過剰は神意に反す』<sup>(同上)</sup>の如き論證法は如何に彼の中世的であるかを示すものである。併し現實に深い興味を有する彼は亦、絶對至高の前にのみ跪いて他を顧みないマリヤの態度を學ぶことは出來ず、『無くて叶ふまじきは唯一つ』と云ふ基督の語の後に、『そは汝が今爲しつゝあるもの』と云ふ注解を加へて、齋観として饗應に奔走するマルタとならずには居られなかつた。彼の歴史觀はそこから起つて來るのである。

## 五

ダンテは其の饗宴篇の裡に於て「時」に就て述べて居る、(Conv.IV.2)而して時は天體運行の連續集積であり、その經過は季節となつて現はれて来る、人間生活の複雜な種々相も季節即ち時の進行の上に現はるものと云ふ意味を述べた。此の意見はやがて又歴史の上にも移して考へられるもので、歴史は人間生活の理想を複雜多種の相に於て現はす舞臺であると云ふ考が其間に認められるであらう。尙又「時」に就ては『我等の苦勞不幸は其の眞相を極め盡せば、殆どすべて時の取扱ひを誤りしこよより起らざるはなし(Conv.IV.2)』と說いて居るが、そこには彼が時の偉大な力を認め、一切の解決を時に委ね、事業の成否は一に時に係ると信じて、時の進行即ち歴史の經過に對して深く期待する所ある彼の態度がよく發揮された。饗宴篇はダンテが政治的活動に失敗して、故郷を追はれて流浪の苦を嘗めつゝあつた時

代に書かれたもので、思を哲學に潜めつゝ靜かに時世の推移を俟ちつゝあるダンテの姿がそこに明かになつて来る。やがて獨帝ハインリヒ七世が現はれて、ダンテの政治的前途に一道の光明が投げられた、彼の希望は一層具體的實際的とならねばならぬ、かくして帝政論に示された彼の傾向は一層の明瞭を加へねばならなかつた。(但し帝政論が書かれた年代に就ては議論が一定して居らぬ、ほどハインリヒ七世の活動した時代の末期、即ち一三一三年頃と見て置くのが至當の様である、委細はサウターの書に譲る)

時の推移を俟つ靜かな態度は、今や古羅馬帝國の實例を引いて、時世匡救、平和實現の範をそこに求め、更にそれを現實の問題にまで結び着けやうとした。彼の史觀は以上の實際的要求から起つた而して神惠主義に基く世界史觀である、此點に於て中世初期の思想を代表するアウグスチヌスと立場を同うすると見て宜しい。要するに(一)世界平和實現の熱望よりして、(二)古羅馬帝國の平和を直に模範とせざるを得なかつた、羅馬の平和を模範とする以上(三)羅馬帝國の歴史を是認せざるを得ない、而して(四)羅馬の世界支配を神意に基くものと決定した、神意に基く以上(五)羅馬史に現はれた幾多の複雜な事相をも是認しなければならない。(七一ノ)此の如き順序を経てダンテは羅馬の世界統治の理想のみならず、其の歴史的事相さへも是認して或は偶然的な事件ですらも必然的な全般的道徳的意義あるものと解釋するに至つたのである。是ダンテが歴史を觀念化しないで、歴史を其の姿のまゝに認めた結果

で現實なるものに對する彼の嗜好はそこにも發揮されて居はしまいか。從て彼は羅馬史上の偉人の行爲を以て、羅馬史に對する偉大な義務的貢獻となし、更にそれを以て羅馬史が神意の發現であるとの證左としたのであつた。(Conv. IV. 5)

ダンテは其の理想乃至崇拜の目的を極めて具體的なものに定めた、哲學者としてはアリストートルを崇拜して、アリストートルを以てあらゆる哲學者を代表させ、彼を指して常にたゞ「哲學者」と云つて居る。(饗宴篇及び帝政論) 又久遠の女性として少女ベアトリチエを崇め、詩人としてヴァージルを模範としたことは云ふ迄もない。以上と同じ意味に於て彼の眼に理想の帝國として乃至理想的な歴史として映じたものは、羅馬帝國であつた。羅馬は實に彼に取て「完全」なるもの總和であり、最も完全な統治の形式であつた。(饗宴四ノ五、帝政三ノ十三) 羅馬の歴史は神の深い惠に基く、(帝政二ノ五、六) 其の帝國建設や世界征服は決して我慾の爲めではなく、全人類の爲めの偉業であつた(帝政二ノ七、十二) 羅馬は世界征服の爲めに常に強敵と決闘(一騎打ちの戰ひ)せねばならなかつた、併し決闘は二人の爭者の上に正しい神の裁判が存すると云ふ確信の下に行はれるもので、それは正しいものである、羅馬が常に世界征服戦に決闘的形式を執り來つたことは、彼等の歴史に神意の働いて居る證據である。(帝政二ノ二) 此の如きスコラ派的な巧緻な辨證法に依てまで、百方羅馬の歴史を是認するに努めた處に、ダンテの強い羅馬崇拜は認められるではないか。

を達成せん爲めには歴史の多種相は必要なりと說いた。<sup>(二ノ七等)</sup> <sup>(帝政一ノ十四)</sup>併し中世人の常として彼は其等歴史の諸相よりして、現代に論及する場合には、歴史の姿をすべて象徴的に解釋し、其のシムボル化せられアレゴリー化された點に於て、歴史は神意の發現なりとの意味を明かにして居る。<sup>(三ノ五)</sup> 従て古典の詩人、ヴァーチルも彼に至て全く歴史的色彩を脱却し、神意を示す寓意的の像とされ、茲に史話が時を超えた普遍的意義のものに化せられ、而して當時の伊太利の現實問題に應用されんとしたのであつた。  
<sup>(二ノ三)</sup> かくして我等はダンテに於て依然中世紀の象徴主義の著しいのを認める、其他神曲全篇が象徴主義の產物であることは云ふまでもない。

## 六

帝政論に於て世界的帝王の出現を希望し、古代羅馬に無限の讚辭を呈し、且又羅馬法王の世間化に烈しい痛罵を浴びせたダンテは、それより數年の後に着手された神曲に至て、活動の生活より一轉して瞑想の生活へと進み入つた。固より神曲と雖も地獄界と淨罪界とに於ては、古今の英雄偉人、殊にダンテと相識の伊太利當代の名士を論評し、賞讃し痛罵して、そこに尙現實に對する強い執着に捉はれて居るが、其の煩悶と焦慮との世界を通過した後、天國に登つた彼は神の大なる榮光の恵みに浴して、心靜かに偉大な平和の樂みを享受して居るのである。此のダンテの著しい轉向は獨帝ハインリヒ七世の殂落其他

の事情の爲め、彼の政治的希望が全く空に歸して、彼をして勢ひ現實的方面に斷念せしめねばならなかつたことに依て、少からず影響されたことゝ思はれる。固より帝政論も神曲も決して周囲の環境が生んだものでなく、要するにそれを生んだものはダンテ其の人である、此の意味に於て時を超越した作品であらうけれども、我等は史的興味の立場からしてダンテの思想の發展を、其の周囲との關係に於て觀察する次第なのである。

帝政論に於てダンテが求めて己まなかつた「平和」は、神曲に於て達せられることが出來た。夙く少年の時代にベアトリチエを見て起つた愛の芽生は、一たび中年期の政治的活動の爲めに抑へられて居た、ベアトリチエを去つてヴァージルに隨從したダンテは、淨罪界の終でヴァージルから再びベアトリチエへと轉向した、而して永らく少女の愛から遠ざかつた罪をベアトリチエから叱責された後、彼女に導かれて愈天國の旅に向つた。<sup>(淨)</sup> <sup>(三〇)</sup> 此活動から瞑想への大なる轉向の時機に於て、リアやマテルダの如き女性を描き出して再び活動の生活を高調したことは、ダンテの現實に對する執着の深さをよく語るものであらう。

淨罪界第五歌にはポンコンテ其他の人々が、生前に幾多の爭鬭を重ねたにも係らず、臨終の悔改めに依て救はれ、神との和らぎを得て心静かに往生を遂げた話が收められて居る。人間窮極の平和は終に神との合致に求められねばならない、『我等が平和は神の御心に在り』<sup>(天國)</sup> すべての願望はそこに至て始め

て達せらる、そこには定りたる場處もなく、何等の極限もない、そこには一切の萬物、嘗て在りしがままに認められる、無限の境には些の無理もなく一切の物が包擁されるのである。(廿二) 顧みれば人間の努力はすべて無用に歸した、皇帝と法王との間に繰返された政教兩權の争ひも亦徒勞に終つたのである。  
(天國) 其等一切の『空虚なるもの』より解放されたダンテはベアトリチエと共に高い天へと登つて行つた、而して聖母マリヤの御前に跪いた、そこには萬動の源たる愛の力のみ認められる、神曲の筆はそこに擋かれて居る。

ダンテの救ひはかくして得られた、併し中年期のダンテの現實的活動はそれに依つて少しも意義を減殺されるものでない。それは彼が生涯の半途に起つた邪路ではなくして、救濟への正道であつたに相違ない、彼が歴史の複雑を是認したと同じ意味に於て、中年に於ける彼の「迂回」を是認したい。厳しい母性の心遣ひからしてベアトリチエは威容を正してダンテの『さまよひ』を責めたが、我等は却てそれをダンテの現實に對する強い執着の結果として、又それをダンテの力の偉大なる發現として是認したい。元來伊太利人の血管には現實を好む強い傾向が流れて居る、古羅馬の文化もルネサンスの藝術も、やがては其の發現でなくして何であらう、我等は信ずる、ダンテも亦其の一人であると。而して彼が『偽の道』(Via on vera) に路み入たことの意義を充分に認めたい、而して地獄界第二圈で不斷の嵐に吹き捲くられる不義の戀人フランチエスカにまで、多少の同情を寄せたダンテの『罪』までも、責めたく

ない。(十三、七、六)

大

類

伸